「西澤蘭陵の墓碑」について

整理番号	題額	題額揮毫	碑記撰文	碑記揮毫
与野〇六	蘭陵西澤翁墓碑銘	前田利豁	芳野金陵	中西孚

鐫刻	撰文建碑年	住所	場所	備考
窪世祥	嘉永四・一八五一	本町東	長伝寺	

一．はじめに

本石碑は、西澤曠野の長男である西澤蘭陵の墓碑である。

〇写真１　石碑正面

○写真２　篆額

○写真３　「碑記」部分

◎碑記

居多累窟廢舉逐利而餂賑急濟厄惡善名入耳又能賦詩言志間遠温粹足以奪風雅之幟者非其胸中開拓別有悠々間日月豈餂然哉如吾父執蘭陵翁葢其人也翁以嘉永四年辛夾正月十一日易簀既葬弟淵齋先生揮淚語予曰吾兄半世在吾家其相依猶形與影今汜若舍吾而逝矣請銘以賁玄宅嗟乎予聞父者熟于耳視行者熟于目何可得而辭翁諱謙字子光通稱儀右衞門號蘭陵西澤氏武藏足立郡與野村人考諱周妣山口氏考夙學平洲先生以博學敦行聞内外孫凡四十餘人家範不嚴而肅毎旦率弟子入祠堂炷香拜跪誦孝經而後就食永以為家訓誦讀之聲至今琅々然孝子順孫之繩々蟄々良有以也翁少凝雋亦學平洲讀書精敏詩才尤驁觸境流出嘗自試才一夜賦百首平洲奇驚曰才萃彬欝足敵祗南海由是詩名噪一社矣翁軀幹鴻大儀觀甚偉而嚣宇寛朴和氣薫人其事親也愉色婉容根於中心弟妹八人友于之情藹々如也雅淡于世味洒然如書生與名流魁士游賽花賞月快飲嘯傲不復覺風塵之丘堆而山積也洊罹災家産不振然視人災患傾筐救之毫無徳色焉翁夙有大志以數奇終不得一展能素境而逝乗化而遊未嘗以此概神滑和既老健歩壯啖無衰頽之容焉嘗軽装履芒放浪關西諸州登崇嶽航巨海亦往賦詩揮毫飽快覩大觀而後歸時年七十四矣予先人耿介不喜汎交翁兄弟外所善不過三四人嘗客翁家二年嘖々稱高義雅量言猶在耳而先人墓木已拱矣翁長于先人一歳而壽且健如是毎一謁翁既喜翁之遐齢又悲先人之不脩俯仰之間未嘗不喜悲紛然也噫思先人而不可見時或謁父執得聞先人行事何樂加之而後先就木唯有二翁今翁亦逝豈特先生之悲耶翁娶尾崎氏生三男五女長文善疾二男皆夭養秡野村窪氏子善配以第三女嗣家長女適勝田氏次

女保坂氏餘皆夭尾崎氏先歿再娶平松氏生四女長嫁梶木氏次女玉井玄仲三女深谷氏次夭歿年八十五塟貞樹山先塋次銘曰

倏爾而來莫然而往其孰使之維理之常君雖往矣其德維炎告雲與仍孝思嗣慶

田中儒員金陵芳野育撰　日官屬生中西孚書

從五位下菅原朝臣前田利豁隷　弟昆　常建

窪世祥刻

＊異体字など

○餂　能。　○哉　哉。　○葢　蓋。　○夾　亥。　○氾　氾。　○謙　謙。　○號　號。　○凡　凡。　○流　流。　○萃　華。

○器　器。　○竒　奇。　○嘗　嘗。　○所　所。　○歲　歲。　○就　就。　○塟　葬。　○雖　雖。　○秡　我。　○炎　光。

○撰　撰。

■**訳注**

◎**題額**

蘭陵西澤翁墓碣銘

◎**碑記**

●**本文**（いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した）

居多累窟、廢舉逐利、而能賑急濟厄、惡善名入耳。
又能賦詩言志、間遠温粹、足以奪風雅之幟者。
非其胸中開拓、別有悠々間、日月豈能然哉。
如吾父執蘭陵翁蓋其人也。
翁以嘉永四年辛亥正月十一日、易簀既葬。
弟淵齋先生揮涙語予曰、
吾兄半世在吾家、其相依猶形與影。
今汜若、舍吾而逝矣。
請銘以賁玄宅。
嗟乎、予聞父者熟于耳、視行者熟于目、何可得而辭。
翁諱謙、字子光、通稱儀右衞門、號蘭陵、西澤氏。
武藏足立郡與野村人。
考諱周、妣山口氏。
考夙學平洲先生、以博學敦行聞。
内外孫凡四十餘人。
家範不嚴而肅。
毎旦率弟子、入祠堂炷香拜跪、誦孝經。
而後就食。永以爲家訓。
誦讀之聲、至今琅々然。
孝子順孫之繩々蟄々、良有以也。
翁少凝雋、亦學平洲、讀書精敏、詩才尤驚、觸境流出。
嘗自試、才一夜賦百首。
平洲奇驚曰、才華彬欝、足敵祗南海。
由是詩名噪一社矣。
翁軀幹鴻大、儀觀甚偉、而器宇寛朴、和氣薫人。
其事親也、愉色婉容根於中心、弟妹八人、友子之情藹々如也
雅淡、于世味洒然如書生。
與名流魁士游、賽花賞月、快飲嘯傲、不復覺風塵之丘堆而山積也。
洊罹災家産不振、然視人災患、傾筐救之、毫無徳色焉。
翁夙有大志、以數奇、終不得一展。
能素境而逝、乘化而遊、未嘗以此概神滑和。
既老、健歩壯啖、無衰頽之容焉。
嘗輕装履芒、放浪關西諸州、登崇嶽航巨海、所往賦詩揮毫、飽快覩大觀而後歸。
時年七十四矣。
予先人、耿介不喜汎交。

翁兄弟外所善不過三四人。
嘗客翁家二年、嘖々稱髙義雅量、言猶在耳。
而先人墓木已拱矣。
翁長于先人一歳、而壽且健如是。
毎一謁翁、既喜翁之遐齡、又悲先人之不脩俯仰之間、未嘗不喜悲紛然也。
噫、思先人而不可見。
時或謁父執得聞先人行事、何樂加之。
而後先就木、唯有二翁。
今翁亦逝。豈特先生之悲耶。
翁娶尾崎氏生三男五女。
長文善、疾、二男、皆夭。
養我野村窪氏子善、配以第三女、嗣家。
長女適勝田氏、次女保坂氏。
餘皆夭。
尾崎氏先歿。再娶平松氏、生四女。
長嫁梶木氏、次女玉井玄仲、三女深谷氏、次夭。
歿年八十五、葬貞樹山先塋次、
銘曰
倏爾而來、莫然而往。
其孰使之、維理之常。
君雖往矣、其德維光。
告雲與仍、孝思嗣慶。
田中儒員金陵芳野育撰。
日官屬生中西孚書。
從五位下菅原朝臣前田利豁隷。
弟昆常建。
窪世祥刻。

●訓訳

◎題額

蘭陵西澤翁の墓の碣銘

◎碑記

累窟に多く居り、廢舉して利を逐(お)ひて、而して能く急を賑(にぎ)はし厄を濟(すく)ふは、惡善の名耳に入る。
又た能く詩を賦し志を言ふも、間々温粹に遠ざかれば、以て風雅の幟を奪ふに足る者なり。
其の胸中開拓して、別に悠々の間有るに非ざれば、日月も豈に能く然らんや。
吾が父執蘭陵翁のごときは蓋し其の人なり。
翁　嘉永四年辛亥正月十一日を以て、簀(さく)を易(か)へ既に葬らる。
弟の淵齋先生　涙を揮ひて予に語りて曰く、
吾が兄　半世吾が家に在り、其の相ひ依ること猶ほ形と影とのごとし。

今汜若として、吾を舎てて逝けり。銘を請ふ、以て玄宅を賁らん、と。
嗟乎、予　父を聞くは耳に熟し、行を視るは目に熟せり、何ぞ得て辭すべけんや。
翁、諱は謙、字は子光、通稱は儀右衞門、號は蘭陵、西澤氏なり。
武藏足立郡與野村の人。
考は諱は周、妣は山口氏なり。
考　夙に平洲先生に學び、博學敦行を以て聞こゆ。
内外孫凡そ四十餘人あり。
家範嚴ならざるも肅なり。
毎旦弟子を率ゐて祠堂に入り、香を炷きて拜跪し、孝經を誦す。
而して後に食に就く。永く以て家訓となす。
誦讀の聲、今に至るも琅々然たり。
孝子順孫の繩々蟄々たるは、良に以有るなり。
翁　少くして凝雋、亦た平洲に學ぶ。
讀書精敏にして、詩才尤も驚にして、觸るる境流れ出づ。
嘗て自ら試み、才か一夜にして百首を賦す。
平洲奇驚して曰く、
才華彬欝たり、祗南海に敵するに足る、と。
是より詩名一社を噪がせり。
翁軀幹鴻大にして、儀觀甚だ偉なるも、而も器宇は寛朴にして、和氣人を薫す。
其の親に事ふるや、愉色婉容として中心に根ざす。
弟妹八人、友于の情藹々如たるなり。
雅淡にして、世味において洒然たること書生のごとし。
名流魁士とともに游び、花を賽ひ月を賞でて、快飲嘯傲し、復た風塵の丘堆して山積するを覺らざるなり。
洊に災に罹り、家産振はざるも、然れども人の災患を視れば、筐を傾けて之を救ひ、毫も徳とする色無し。
翁夙に大志有り、數奇を以て、終に一展するを得ず。
能く境に素して逝き、化に乘じて遊び、未だ嘗て此を以て神を概き和を滑さざるなり。
既に老ゆるも、健歩壯啖にして、衰頽の容無し。
嘗て輕裝して芒を履き、關西の諸州を放浪す。
崇嶽に登り巨海に航し、往くところ詩を賦し筆を揮ひ、大觀を快覩するに飽きて、後ち歸る。
時に年七十四なり。
予が先人、耿介にして汎交を喜ばず。
翁が兄弟の外に善くするところは三四人を過ぎず。
嘗て翁が家に客たること二年、嘖々として高義雅量を稱せり。
言猶ほ耳に在り。
而して先人の墓木已に拱たり。
翁は先人に長ずること一歳にして、壽にして且つ健なること是のごとし。
一たび翁に謁する毎に、既に翁の遐齡を喜び、又た先人の俯仰の間を脩せざるを悲しむ。
未だ嘗て喜悲紛然たらざらずんばあらざるなり。

噫（ああ）、先人を思ふも見るべからず。
時に或ひは父執に謁し先人の行事を聞くを得ること、何の樂しみか之に加へん。
而して後に先に木に就けば、唯だ二翁有るのみ。
今翁も亦た逝けり。豈に特（た）だ先生の悲しみのみならんや。
翁尾崎氏を娶り三男五女を生む。
長の文善、疾あり。二男、皆（とも）に夭せり。
我野（あがの）村の窪氏の子、善を養し、配するに第三女を以てし、家を嗣がしむ。
長女は勝田氏に適し、次女は保坂氏に（適す）。
餘は皆な夭せり。
尾崎氏先に歿す。再び平松氏を娶り、四女を生む。
長は梶木氏に嫁し、次女は玉井玄仲に、三女は深谷氏に（嫁す）。次は夭せり。
歿年八十五、貞樹山先塋の次に葬らる。
銘に曰（しゅくじ）く
倏（ゆ）爾として來り、莫然として往けり。
其れ孰か之をしてしからしむるか、維だ理の常なり。
君往けりと雖も、其の德維れ光（かがや）く。
雲と仍（じょう）とに告ぐ、孝思慶を嗣がん、と。

田中儒員金陵芳野育撰す。
日官屬生中西孚書す。
從五位下菅原朝臣前田利豁隷す。
弟昆常建つ。
窪世祥刻す。

●人物
○蘭陵西澤翁　明和四（一七六七）年から嘉永四（一八五一）年。字は子光、号は蘭陵、西澤家当主としての通称儀右衛門。曠野の長男。父同様、細井平洲に師事した。特に詩に勝れていたという。墓は長伝寺の西澤家墓域にある（墓碑「与野〇六」）。
○弟淵斎先生、弟昆常　蘭陵の弟、西澤常。天明七（一七八七）年から安政五（一八五八）年。字は子典、通称は泰仲、号が淵斎。曠野の四男で、昆家の養子となり、昆姓を昌す。医者となる。芳野金陵に「昆子典墓碣銘」（「金陵遺稿」巻六）がある。
○考諱周　西澤曠野。寛保三（一七四三）年から文政四（一八二一）年。字は子邦、通称万次、西澤家当主としての通称儀右衛門。折衷学派の細井平洲に学んだが、郷里の与野に帰り、名主としての務めを果たす傍ら、地域の教育にも力を入れ、「孝経」の講読などを通して郷人を感化した。また天明の飢饉では資材をなげうって救済にあたるなど、地域振興にもつとめた。与野の俳人鈴木荘丹（一七三二～一八一五）や久下戸村（現川越市）の儒者奥貫友山（一七〇八～一七八七）などとも交遊があった。芳野金陵に「西澤愚公傳」がある（「金陵遺稿」所収）。
○細井平洲　享保一三（一七二八）年から享和元（一八〇一）年。本姓は紀氏。号は平洲または如来山人、諱は徳民、通称は甚三郎。字は世馨。尾張国知多郡平島村（現愛知県東海市）出身。朱子学等一学派の教えにこだわらず、様々な学派学説の長所を取るという、

いわゆる「折衷学」の立場であった。米沢藩や尾張藩に招かれて侍講や藩校の学長を務めたりした。米沢藩の上杉鷹山からの信任を受け、米沢市の松岬神社に、上杉鷹山と共に祀られている。

○芳野南山　明和四（一七六七）年から天保二（一八三一）年。名は彝。字は序卿。号が南山。芳野金陵の父。家は代々下総葛飾郡松ケ崎村の庄屋で、彼は医を業とする一方、漢詩人文人としても活躍した。死後「南山詩文遺稿」がまとめられた。

○芳野金陵　享和二（一八〇三）年から明治十一（一八七八）年。名は成育。字は叔果。通称愿次郎。号が金陵、また匏宇。芳野南山の次男。文政六（一八二三）年、江戸へ出て亀田鵬斎に師事し、やがて私塾を開いて教授した。弘化四（一八四七）年、駿河国田中藩主本多正寛に召し抱えられて儒臣となる。藩の財政改革、文武学校の創設など藩の文教政策を推し進めた。文久二（一八六二）年には幕府に招聘されて昌平黌の儒官となり、教授・博士もつとめた。本碑文を書いたのは、田中藩儒臣時代の五十歳のとき。なお金陵には、西澤曠野の伝記である「西澤愚公傳」と曠野の四男昆常の墓碑銘である「昆子典墓碣銘」がある（いずれも「金陵遺稿」所収）。よほど西澤家と親しかったのであろう。

○祇園南海　延宝四年（一六七六）年から宝暦元（一七五一）年。幼名を与一郎、名は正卿、または瑜。字は伯玉。号は南海のほか、蓬莱等。紀伊の人で、家は紀伊藩の藩医。江戸に出て、元禄二（一六八九）年に木下順庵の門に入る。同十（一六九七）年、父の跡を継いで、紀州藩の儒臣となる。作詩に秀で、新井白石・梁田税巌とともに三大家と称された。正徳元（一七一一）年には、来日した朝鮮通信使の接待役の任を受け、持ち前の詩才を披露するなど大いに活躍して名をあげた。また書画を善くし、服部南郭、柳沢淇園、彭城百川とともに日本文人画の祖とされる。

○中西孚　不詳。

○前田利豁（としあきら）　文政六（一八二三）年から明治十（一八七七）年。上野七日市藩の第十一代藩主。加賀前田氏の縁者で、天保十一（一八四〇）年、十八歳で家督を相続。明治二（一八六九）年の版籍奉還で七日市藩知事に任ぜられるが、長子に家督を譲り、隠居した。本篆額を書いたのは、藩主時代で、二十九歳のとき。

○窪世祥　生没年不詳。正しくは、大窪世祥で、名前は世昌、また世升とも書いた。江戸後期の石碑の石工。嘉津山『江戸前の石工 窪世祥』（第一書房、二〇一六）によれば、その作品は、文化元（一八〇四）年から安政元（一八五四）年のものが確認されるという。大窪行（号詩仏）と巻大任の揮毫、及びその門下の揮毫を雋刻する際に、窪世昌が用いられていることが多いという。

●語注

◎題額

○碣銘　もともと碣は、上部が丸い石碑で多く生前に建てるものを指したが、後には特にそれにこだわらず、単に石碑を指す語として用いられる。

◎碑記

○居多　多きに居る、大部分を占める。

○累窟　「窟に累す」で、倉庫にしまっておく。

○廃舉　物価の安い時に仕入れ、高い時に売り出して利益を得る行為。「史記」仲尼弟子

列伝に見える（子貢の好んだこととして）。
○逐利　利潤を追求する。「史記」平準書に見える。
○賑急濟厄　賑済で、賑救に同じく、金品で人を救うこと。四字句で、金品で危急災厄から人を救うこと。
○賦詩　詩を作る。
○言志　心に思うことを述べる。「尚書」舜典に「詩言志（詩というものは、人が心に意図するところを言語に表現したものである）」とある。君子の行い。
○間　時々。
○遠　とおざかる。
○温粹　おだやかで純粋である。
○風流　俗事を捨てて高尚な遊びをすること。
○儒雅　広く学問をおさめた立派な儒者。また学問があり、上品なさま。
○幟　目印の旗、のぼり。志に通じる。
○胸中　胸の内、気持ち。
○悠々間　ゆったりとした自由な空間。それが心の中にあるとする。
○日月　日月のように徳の高い聖人。
○父執　父親の友人。本銘文の撰者芳野金陵の父は、芳野南山で、西澤蘭陵と親しかった。
○嘉永四年　西暦一八五一年。ペリー浦賀来航の二年前。
○易簀　すのこをかえる。臨終に及んだことを言う。
○揮涙　声を出さないようにして涙をはらう。
○半世　人生のなかば。
○相依猶形與影　いつも一緒にいたことのたとえ。
○汜若　汜は、枝川。意味が通じない。汜（はん）の誤表記と解する。汜の意味は、ただよう。若は如に同じく、然の意味。汜若で、拘束されずただようさま。亡くなって、地上つまりこの世界から、魂が漂い出てあの世へ旅立つことを言うのだろう。
○賁　かざる。
○玄宅　死後の住居、墓。
○聞父　父は金陵の父、芳野南山を指す。後出するが、父の死後、金陵は、亡父のことについて旧友であった蘭陵からいろいろ聞かされている。このことを言うのだろう。
○熟　慣れ親しむ。今でもわが身になじんで残っていることを言うのだろう。
○視行　蘭陵の行為、姿を目にしたことを言うのだろう。
○考　父親。
○妣　母親。
○夙　ここでは、昔。
○平洲先生　細井平洲。
○博學　学識が広いさま。
○敦行　人情があついこと。
○家範　その家の者が遵奉すべき教え。
○巖　厳格である。
○肅　粛正。つつしみ深く正しい。
○祠堂　祖先を祭るみたまや。

○炷香　香を焚く。
○拝跪　ひざまずき、かしこまってお辞儀をする。
○誦　声をあげて読む。
○孝經　儒教の経典。孔子と弟子の曾子との問答体で孝のあり方を説いたもの。「身体髪膚これを父母に受く。あえて毀傷せざるは孝の始めなり」の句は有名。家庭道徳であった孝を、政治思想のレベルに高めて大系化したもので、総文字数二千字程度と比較的短い中に思想内容がコンパクトにまとめられていることから、儒教の入門書として広く長く読み継がれてきた。
○家訓　一家のきまり。
○琅々　宝玉や金属が触れあって鳴る美しい音。孝経朗読の素晴らしい声を喩える。
○順孫　孝孫。祖父母によく仕える孫。
○繩々　絶え間なく続くさま。
○蟄々　和らぎ集まるさま。
○凝雋　熟語は無いが、凝は、こらす、堅固なものにする。雋は、俊に通じ、才能が傑出して優れている。凝雋で、傑出した才能のかたまり、と解した。
○亦　父の曠野に引き続き、蘭陵もまた平洲に学んだ。
○精敏　物事に通じていて賢いさま。
○驚　古代の伝説上の駿馬の名。速く走る、先頭切って走る。
○觸境　熟語は無いが、境は処と同義の「場所」とすれば、触境は、ふれるところ、到るところ。
○流出　詩文が口から流れ出ること。
○奇驚　熟語は無いが、奇は、動詞化してめったにない優れたことと考える。奇驚で、驚きめったにない優れたことだとみなした。
○才華　文才など外に現れた才智。
○彬蔚　蔚は、蔚（うつ）に同じ。彬蔚は、文彩の盛んなさま。
○敵　匹敵する。
○祇南海　祇園南海。中国風に姓を漢字一文字で表したもの。
○噪　とどろく。
○一社　平洲一門を詩の結社とみなしたのであろう。
○軀幹　からだの骨組み。からだ。
○鴻大　大きい。
○儀觀　威儀（おごそかで礼義にかなった行動や態度）。
○偉　立派で優れている。
○器宇　器量。心の広さ。度量、見識。
○寛朴　熟語は無いが、寛は、広い、寛大。朴は、純朴。
○和氣　なごやかな気分、雰囲気。
○薫　香りをつける、人によい感化を与える。
○愉色　喜びに満ちた顔つき。
○婉容　柔和な姿、おとなしい態度。
○根　根ざす、根をはる。
○中心　心の中。

○友于　兄弟の仲がよいこと、兄弟を敬愛すること。「友于兄弟」の上二字を取った。
○藹々　穏やかなさま。
○雅淡　雅やかで飾り気のないこと。
○世味　世間の人情。
○洒然　心にけがれやわだかまりがなく、さっぱりとしているさま。
○書生　読書人。生徒。
○名流　世に名の通った人、名輩。
○魁士　大学者。
○賽花　熟語は無いが、賽は、競争する。花を愛でてその美しさを比較して競うことだろう。
○快飲　快く酒を飲むこと。
○嘯傲　声をのばして吟じる。
○風塵　土ぼこり。俗世間、世俗。
○丘堆　熟語は無いが、山積と同義だろう。
○山積　山のようにうず高くつもる。
○洊　しきりに。
○家産　家の財産、身代。
○傾筐　ありったけのものを出すこと。
○毫　細長い毛。少しも。
○徳色　徳のあるのを誇る顔つき。
○夙　若いころ。
○大志　遠大な志。
○數奇　不運。
○展　のばす、羽を広げる。才能を開花させることのたとえ。
○素　ある境地に位置する。「礼記」中庸に「君子素其位而行、不願乎其外。素富貴行乎富貴、素貧賤行乎貧賤、素夷狄行乎夷狄、素艱難行乎艱難（君子はその地位にあったときはその地位で行うべき事を行い、その他の事を行うことを望まない。富貴であったら富貴の行いをし、貧賤であったら貧賤の行いをし、夷狄の中にあったら夷狄の行いをし、艱難の中にあったら艱難の行いをする）」とある。その地位にふさわしい行いをして、それ以上の高望みをしないということ。
○境　自分のおかれた境遇。
○逝　逝去するだが、生涯を全うする、だろう。
○乗化　自然のままに従う、生命が変化するのに従うこと。陶淵明「帰去来辞」に「聊乗化以歸盡、樂夫天命復奚疑（自然の変化にわが身をあわせ、生命の終わるのを待ち受ける。天命を素直に受け入れて楽しむ境地に入れば、もはや何の迷いもなくなってしまうのだ）」とある。
○遊　自由自適に生きることだろう。
○慨　慨に通じる。なげく。
○神　精神、心。
○滑　滑は、汨（かきみだす）に同じ。
○和　心の調和。

○健歩　足が達者なこと。
○壯啖　食欲が旺盛なこと。
○衰頽　体や精神が衰弱すること。
○容　すがた、姿態。
○芒　カヤの一種。ここでは芒鞋、芒履で、わらじ。
○快覩　心地よく見る。
○大觀　雄大な景色。
○先人　亡父。
○耿介　狷介に同じ。節操を堅持して世俗におもねらない。
○汎交　広い交際。
○客　客人として逗留する。一応、亡父が逗留し、亡父が翁を褒めた言葉が、私の耳に残っている、と解した。あるいは、芳野金陵が逗留し、翁が亡父を褒めた言葉が、私の耳に残っている、のかもしれない。
○嘖々　称賛嘆息の声。
○高義　行いが崇高で正義にかなっていること。
○雅量　広い度量、寛大な気性。
○墓木已拱　拱は、両手で抱える。墓に植えた木が両手で抱えるほどになる。死後長い年月が経ったことを言う
○遐齢　遐は、はるかに遠い。長寿。
○脩　長くする。
○俯仰之間　わずかの間。
○紛然　世の中が乱れているさま。日本語的用法では、ごたごたしているさま。こちらであろうか。
○行事　過去の事柄。
○就木　棺に入ること。
○二翁　一翁の誤りではないか。この碑文で翁とは、蘭陵を指す。二翁の語はなじまない。
○先生　蘭陵の弟、常、淵斎のこと。
○我野村　現在の飯能市北西部の吾野あたり。江戸時代は上我賀村と下我野村があった。
○善　渡辺刀水「西澤曠野と其子孫」（以下「渡辺」）によれば、名は善右衛門。「酒に強かった以外は全く無趣味の人」だったという。
○第三女　「渡辺」によれば、四女。名は満佐（まさ）。家庭で父から教育を受けて和漢の学に通じた才媛であった。ある大名の奥に仕え江戸に数年いたが、帰郷後婿を取ったのが前掲の善右衛門であったという。
○先塋　祖先の墓域。
○倏爾　すみやかなさま。
○莫然　ひっそりとして語らないこと。
○光　光り輝く。
○雲與仍　本人から七世代あとの孫を仍孫といい、八世代あとの孫を雲孫という。仍は、連続すること、雲は雲のように遙か彼方の意。
○孝思　親に孝行する思い。
○慶　幸い。

●**口語訳**（章立てと小見出しは訳者が便宜的につけた）

【善き名声と風流儒雅の人】

財貨を溜めることに日を費やし、投機的な活動をして利益を追い求める、それでいてその利益で以て危急や災厄を救うことができたとしても、それでは善き名声のみならず悪い評判も立つことになるだろう。

また詩を作って志を述べるという君子の行いができたとしても、少しでも穏やかさや純粋さから遠ざかるようであっては、風流儒雅の名を奪われるのに十分であろう。

その胸のうちが広々と開けていて、世俗とは別の悠々とした空間があるのでなければ、日月のごとき聖人に近い人だとしても、善き名声や風流儒雅の名を得ることはできないだろう。

私の父親の友人であった西澤蘭陵翁こそは、そうした善き名声を得た風流儒雅の人であると言えるだろう。

【翁の逝去と碑文の依頼】

西澤蘭陵翁は、嘉永四年辛亥の歳、正月十一日を以て臨終に及び、埋葬された。

翁の弟の西澤常淵齋先生が、涙を拭いながら私にこう語った。

「私の兄は、その半生を自宅で暮らし、その間、兄と私とは形と影のようにいつも一緒だった。それが、今や、ふわりと漂いながら、私をこの地に残して逝ってしまった。兄の墓碑銘を書いてくれませんか。それでお墓をかざりたいのです」と。

ああ、私は、翁から父のことを聞いていたが、その声はまだ耳に残っており、翁の行為や姿もまだ目に残っている。（そのように翁と親しく交わり、恩義のある私が、）どうして碑文の依頼を断ることができるだろうか。（今ここに墓碑銘を記す。）

【翁の出自】

翁は、武蔵の国足立郡与野村のである人。

【翁の父親と一家】

父親の諱は周で、母親は山口氏である。

翁の父親西澤曠野は、昔、細井平洲先生に学んだが、学識の広さと篤い人情の持ち主としてその名が知られていた。

内孫外孫あわせて四十人あまりいた。

【西澤家の家の教えと「孝」】

西澤家の教えは、厳格ではなかったが、つつしみ深く正しいものがあった。

毎朝、弟子を率いて、先祖を祀るみたまやに参拝し、香を焚き、跪いて礼拝して、全員で「孝経」を誦読した。

そうして後に、ようやく朝食の場に就くのだった。これを永く家訓としていた。

「孝経」誦読の美しい声は、今に至るまで延々と鳴り響いている。

西澤家に、親孝行な子や孫が絶え間なく続き、和らぎ集っているのも、まことにもっともなことである。

【翁の学問、詩才】

翁は、年若いころから傑出した才能のかたまりで、父親に引き続き細井平洲に入門して学んだ。

その学問は万事に通じて賢いものがあったが、とりわけ詩才において突出したものがあ

った。折に触れては、詩文が口から流れ出るように発した。
かつて、わずか一晩で、百首の漢詩を作ったことがあった。
師の平洲も、驚き、めったにないことだと褒めて言った、
「その文才の盛んなことは、祇園南海にも匹敵すると言えるだろう」と。
これより翁の詩名は、一門にとどろき渡ったのである。

【翁の人となり】

翁は体格が大きく、威儀がとても立派だったが、度量は広く寛大で、かもしだす和やかな雰囲気は人びとによい感化を与えるものがあった。

【親への孝と兄弟への友愛】

親に仕えるときは、喜びに満ちた顔つきで柔和な姿を見せ、心の底から孝を尽くす姿勢を見せていた。
弟と妹が八人いたが、たがいに慈しみあう心は、まことに穏やかなものであった。
また雅やかだが飾り気が無く、世間の人情などにとらわれることもなく、心がさっぱりとしており、まるで書生のように素直で初々しかった。

【世俗を超越した楽しみ】

名輩や学者たちと遊行しては、花を競い、月を愛でた。気持ちよく酒を酌み交わしては詩を吟じて楽しみ、世間で、世俗の土ぼこりが積もっても全く気にすることは無かった。

【困窮者の救済】

家が繰り返し火災にあい、身代は振るわなくなったが、他の人が災いに遭って困難に陥ると、家産を傾けてでもそれを救済した。しかもそれを当然のこととして、少しも誇りとするような気配も示さなかった。

【境遇を素とする】

翁は若い頃は世に出るという大志を抱いていた。しかし不運にみまわれて、結局羽を羽ばたかせて飛び立つことはできず、郷里で一生を終えた。
しかし、その境遇に甘んじてその地位で行うべき事を行って生涯を全うし、自然のままに従って自由自適に生きた。
自らの境遇について精神的に嘆いたり、心の調和を失うようなことは決して無かったのである。

【老年の強健ぶり】

翁は歳を取ってからも、足腰が強健で、健啖であり、気持ちも体も少しも衰える兆しすら見せなかった。
かつて、軽装で草鞋を履き、関西の国々をきままに旅したことがあった。
高い山に登り、大海を船でおし渡り、至るところで詩を作ったり、筆を振るって揮毫したりした。そして雄大な景観を、あきるほど心地よく眺め渡って、ようやく帰郷したのだった。それは実に、翁の年七十四歳のときのことであった。

【金陵の父と翁との交際】

私の亡父は、頑固で他人に和合せず、幅広い交際を好まなかった。
その亡父が交わったのは、翁とその兄弟以外では三四人くらいであった。（かず少ない友人の過半が翁とその一族であった）
亡父は翁の家に二年間ほど客人として逗留したことがあった。その折り、亡父が翁のことを、行いが正義にかなっている、広い度量、寛大な気性の持ち主であると称賛したこと

があった。その言葉が、今も私の耳に残っている。

【父没後の翁との交わりと別れ】

その亡父も鬼籍に入ってから長い年月が経った。

翁は亡父より一年年長であるに過ぎないのだが、その長寿と健康ぶりは、既に述べてきた通りである。

私は翁にお目にかかるたびに、翁の長寿を喜ぶ一方、亡父が長く生きられなかったことを悲しむ気持ちが湧いてくるのだった。まさに悲しみと喜びとが一度に押し寄せるさまだった。

ああ、しかし、亡父をいくら思っても、もう二度とお会いすることはできない。

ただ、時折、父の友人だった翁にお会いし、父の生前の言葉や行いについて話を聞くことができ、それが何よりの楽しみであった。

そして父は先だって亡くなっていたわけで、こちら側にはただ、翁お一人だけがいらっしゃったのだ。

ところが、その翁もまた逝ってしまわれた。これは父を亡くされた淵斎先生だけの悲しみではない。（亡父とのつながりであった翁を失うのは、私にとっても大きな悲しみである。）

【翁の家族】

翁は尾崎氏を娶り、三男五女を生んだ。

長男の文善は、疾持ちで、二男とともに、夭逝した。

吾野村の窪氏の子、善を養子とし、三女をめあわせて、家を嗣がせた。

長女は勝田氏に、次女は保坂氏に嫁いだ。

その他の女子は夭逝した。

尾崎氏は翁に先んじて亡くなった。そこで平松氏を後妻として迎えた。平松氏は、四人の娘を生んだ。

長女は梶木氏に、次女は玉井玄仲に、三女は深谷氏に嫁いだ。四女は夭逝した。

【翁の逝去と埋葬】

翁は没年八十五歳。貞樹山長伝寺の一族の墓域に葬られた。

【銘】

銘に言う、

速やかにやって来て、

ひっそりと去って行く。

（こうした人の一生は）誰がそのようにしているのか、

それは「理」の常なのだ。

あなたは逝ってしまわれたが、

その優れた徳は燦然と輝いている。

子々孫々に告げん、

孝の思いこそ、幸いを継ぐものだ、と。

【記事】

田中藩の儒員、金陵芳野育が撰した。

日官屬生の中西孚が書した。

従五位下菅原朝臣前田利豁が隷書の額題を書した。

弟の昆常が建てた。
窪世祥が雋刻した。

三．資料

（一）「新編武蔵風土記稿」（文化三十（一八三〇）年）巻一五五　足立郡之二十一

●與野領

◎與野町：寺院

○長傳寺

「淨土宗、江戸増上寺末、貞樹山觀智院と號す、古は御朱印地なりしが、後故ありて収公せられしと云、開山は普光觀智國師なれど、それより以前草創ありし古刹を中興せしなるべしと云、本尊は彌陀の立像長三尺許、作は定朝とも或は運慶とも云、内佛の本尊は三尊の彌陀長一尺三寸許、惠心の作なり、又愛染の像あり、長五寸許、運慶の作なり、佛前に葵御紋を彫たる木地の香爐一箇あり、公より御寄附のものなりと云ふ」

（二）「武蔵国郡村誌」（明治十五（一八八二）年）　巻之十

◎與野町：仏寺

○長伝寺

「縦四十八間横四十六間面積六百二十四坪町の北端にあり淨土宗東京芝増上寺の末派たり（以下「風土記稿」）」

四．主な参考資料

①翻刻

・『埼玉県教育史金石文集（上）』（一九六八）。

・『与野市史　中・近世史料編』（一九八三）。

・嘉津山清『江戸前の石工　窪世祥』（第一書房、二〇一六）。拓本も収録。

②論文など

・渡邉刀水「西澤曠野と其子孫」『埼玉史談』（四ノ五、一九三三）、『渡辺刀水集』四（青裳堂書店、一九八九）所収。

・『与野市史・通史編　上巻』（一九八七）。

③関連碑文

・「西澤曠野の墓碑」（「与野〇四」）

・「西澤曠野夫人の墓碑」（「与野〇五」）

・「史蹟西澤曠野先生墓所碑」（「与野〇七」）

以上

二〇二四年三月　薄井俊二訳す